これからの猪猟

〈2回〉

田宮　治

狩猟魂

私が生国で培われ育まれた「三つ子の魂」は、激変する時代の波に押し流されることもなく、大都会の東京に出てからも生き続けた。そして、ますます増幅され、やっとこの年（七十五歳）で本物が完成したようである。

一事が万事、物事の成長や完成は、強い気持ちを持ち続け挑戦することが大切である。何事が起ころうとも揺らぐことなく、決して諦めずに絶対の自信を持って頑張り通せば、その先に見事な花が開くものである。

誰もが当然だと思う分かり切ったことでも、いざ実行してみようとなると、思いつきや俄仕込みでは何一つ納得することなどできない。そんなことをくどくど理詰めで押し進めてもおもしろくもおかしくもなく、何も残らない。そこで、私なりに考えた、狩猟人生の基盤となっている大事な生国での狩猟鍛錬の様子を具体的に記述する。

その前に、私が何十年もかけて登り詰めた一番大事な結果、つまり、これまで狩猟ができるようになった今猟期の大一番や激戦を交互に挟みながら発信していくことで、何とか我慢して耐え忍んで絶対に諦めず頑張り続ければ、必ず目標の道は開けて、素晴らしい狩猟が実践できることを証明したいのである。

伸るか反るかの大一番

月日の経つのは早いもので、「猪犬と登る猪猟の頂点」の連載が終わった時が、私にとってちょうど二猟期目が終わった平成二十五年三月十五日となっていた。

若者たちに最後のご奉公だと思い一生懸命に猪猟を教えてきたのも、元を正せば生国で覚え育まれた大好きな狩猟を守り抜き、大きく前進させて先に繋ぎたい一念だった。その後の二年間は、私にとってその大役から放免され、やっと自由な単独猟に戻った貴重な猟期だったのである。

私は単独猪猟人になり切って、今までの猪猟を総点検しながら全く自由な立場で改革を断行して、さらなる高嶺の月を射ることであった。そんな大目標の中核でも、特に大切にしたいのが楽しい猪猟である。本来、猪猟技術も犬芸も十分であり、無理しなくてもいいのだが、そこが三つ子の魂のなせる技であり、生来の負けじ魂が独自に押し進める俺流の「これからの猪猟」なのである。

とかく人間は「これでよい」と満足してしまえば成長もそこで止まり、その先に繋がる道は閉ざされる。どこまで登っても他人の登った形跡が残っている限り、「まだまだこれからだ」と負けじ魂に火がつく。

幸い、私には三つ子の時からの貴重な猟体験と、ぞっくり揃った一流犬群がついている。どんなに厳しい狩猟界でも、必ずサバイバル戦に勝ち残り、前人未到の頂点に立ちたいのである。

そんな思いを見事に実証できるチャンスを私に授けてくれたのが、わが愛犬たちだった。

その人生最高の大一番となったのは、ちょうど千葉県の猟期が終わり、山梨の猟場に出猟した平成二十五年二月二十三日の土曜日のことである（猟期が延長され三月

十五日まで)。

この日は絶好の猪猟日和で、快晴の上、無風だった。ちなみに風は、止め犬にとっては最悪である。それは猪の体臭が風で吹き消されるからだ。

「今日こそは!」と気負って走り、中央高速の笹子トンネルを出る頃にはすっかり辺りが明るくなり、右側に険しい山並みが見えてきた。思えば、昨猟期はこの山だけで三頭の大猪を撃ち獲った。確かあの杉林の下で、あの小沢辺りだったよなと感慨も一入で、にやにやしながら勝沼インターを出たのが七時前だった。あと三十分もすれば猟友の松土さんの家に着くが、今日は彼とは共猟できない。

松土さんは農業委員や地元の八幡村のグループリーダーをやっており、面倒見のいい人である。もう二十年以上も親交を続けている。私にとっては大切な猟仲間であり、勢子長として彼が使っている犬たちは、以前から私の犬舎で育った犬たちである。今猟期もその犬たちが猪をよく止め切るようになり、大猪や、一度に二頭の猪を止め撃ちできたと大変喜んでいる。

私が山梨に出猟した時、私の犬舎の犬たちが立派に仕上がって、見事な猪猟をやっていると聞くのが何よりも嬉しい。山梨県は猪猟の本場であり、以前は三十人くらいの大グループが追い犬や紀州犬で猟場を独占していた。

ところが、今では私の犬舎の犬たちが活躍の場をどんどん広げ、他の地区のグループも好んで使ってくれるようになり、数人の勢子長と交流を深めている。

わが犬舎の田宮系猪犬たちのお陰で人脈を広げて、感謝され、その上に彼らの大事な猟場にまで全く自由に出猟して単独猪猟ができるようになった。このことが何よりの収穫であり、最高の励みになっている。

ところで、今日は八幡グループの活動日なので松土さんと共猟はできないが、もし単独猟の私に何かあった時にすぐ駆けつけてもらえるように、お互いの出猟場所を確認し合っておくことが大切なので、事前にお願いしておくのである。

松土家に到着したのは七時十分であった。「おはようございます」と挨拶する私を「早かったね。どうぞどうぞ」と家の中に招いてくれた。「今日はだめだが、明日は一緒にやろう」と言いながらお茶と干し柿を出してくれた。そして、「今日は雪が残っていて大変だと思うが、良い天気だから中部林道の峠辺りをやってはどうかね」と言ってくれたので、「そうします」と即座に返事をした。

「松土さんのグループはどの山をやるのかね」と確認すると、「集落が県道の両側に並ぶ峠に向かって、左側の大山を予定している」とのことである。

そうすると、私のやる峠からは集落の中を通っている道を挟んだ大きな谷越しとなるので、無線の連絡はつかないと思ったが、「携帯電話ならば大丈夫だよ」とのことだった。

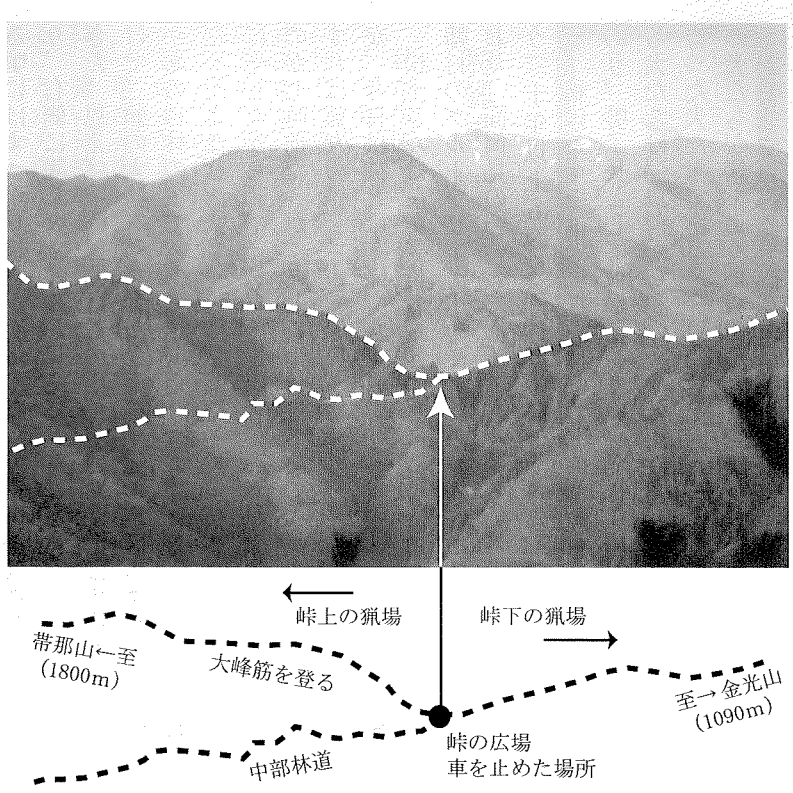
そこで私は念のために、「猪を必ず獲るからその時はよろしく頼みますね」と大口を叩いた。松土さんは、そんなにうまくいかないよ、とでも言いたそうに、ニコニコしながら「分かりましたよ。頑張ってください」と言ってくれた。私はほっとして「ありがとう。松土さんも頑張ってください」と言い残し、勇んで目的の峠に向かって出発したのである。

いざ決戦の時が来た

さて、ここからが私の得意とする正真正銘の単独猟となった。山梨県の猟場はどこに行っても一〇〇〇メートルを超える大山であり、厳しい崖が多いので、全くタツを置かない一人猟で猪を獲ることなど考えられない。そのため、この猟場では、以前から大勢のグループで大山を取り囲み、追い犬を使った猪猟が主流となっていた。

ところが、隆盛を極めた大グループも狩猟人口が減り続けて、最近では十人前後の小グループに様変わりしてしまった。そのため、なかなか猪が獲れなくなったので、止め犬を使って猪を獲る「止め犬猟法」に転換したのである。

こんな大山の厳しい猪猟場では



峠の広場を中心にした山梨の猟場

当然のことで、犬たちが猪をがっちり止め切らない限り十人くらいでは猪を獲ることはできない。せいぜい「単独猟より少しはマシだ」という程度である。

松土さんのグループも例外でなく十人前後となっているが、私の犬舎の止め犬で良い猟をしている。鹿は別にしても、この人数では猪に寄り付くのは大変で苦戦しているようである。

そんな状況の中で、私が猟に出かける時は、以前からこのグループの猟場を使わせてもらっている関係もあって、隣の山や大峰を挟んだ反対側の猟場のすぐ連絡が届く場所で猪猟をやることにしている。

さて、いよいよここからが私の最も得意とする単独猟となるのだが、峠の上に聳えるのが一八〇〇メートルの帯那山である。この峠に通じる中部林道と平行するように、峠から五〇〇メートルくらい上に曲がりくねった立派な舗装道が頂上付近まで通っている。この大山の峠を上と下に二分して、従来から大物猟を楽しんで慣れ親しんできた猟場である。

走り出して十分もしない辺りから道路一面が雪となり、急な上り坂で、しかも凍結している。四輪駆動にしてゆっくりゆっくりと両側の雪中に残る猪跡を確認しながら進むが鹿跡ばかりで、猪跡は目的地の峠まで見当たらなかった。本来なら、この峠の広場に車を止めて大峰伝いに峠の上か下を狩り込む予定だったが、猪が入っていないのでは仕方がない。

入念に両側の猪跡を探しながらつづら坂をゆっくり下り、通称「小屋の沢」の橋上に差しかかった時、雪にくっきり残る大猪の足跡があった。小屋の前の広場に車を止め、逸る気持ちを抑え、一つひとつの足跡を注意して確認する。やはり猪跡で、しかも朝方の泥足跡である。「よしよし、これはいい。すぐ近くにいるぞ」と、にやにやしながら猟支度をする。

思えば、この小屋の沢での猟果は多く、メス猪の一五七キロをゲットしたり、大雪の中で、かつてのクマ号、ブル号、アニー号が沢の奥で八時間も大猪と戦った。ちょうどその日に、松土さんと初めて出会った所でもある。

この沢の奥は厳しい岩場で、とても登れる所ではないが、何十回と実戦を重ねてきているので、頂上までの抜け道も猪の跳ぶ方向も寝屋に至るまでも、すべて頭の中に叩き込んでいる。

この雪の中で猪が寝ているとすれば、奥に向かって左側で、日当たり平のすぐ上の雑木まじりの岩場とみた。

猟期は終わりに近づいてきているので、多分、逃げ上手の七、八〇キロくらいだろうと思い、ここは一番、咬み追い自在のマロ号、ヨ

シ号、シロ号の三頭に決めて、一気に勝負に出たのである。

車に残っている三頭の犬たちも、猪の臭いを嗅ぎ分けているらしく、「すぐ放せ」とワンワンと鳴いてせきたてている。静かに「待て、待て！」となだめ、猪の早立ちを警戒しながら「そら、マロ行け！　ヨシ行け！　シロ行け！」と、静かに声をかけて順次車から放し、犬たちの後に続いて小屋のある大杉林を登り始めた。

猪跡は杉林の中にある奥に通じる小道ではなく、思ったとおり小道を横切り杉林の急坂を真っすぐ登り、よく猪が寝ている日当たりの良い雑木林に向かっている。

「やっぱりあの岩場だな……」とGPSで見ると、犬たちは既に猪に気付いているようで、どこにも寄り道しないで真っすぐ猪の寝屋場に突進している。

これはすぐ出るぞと直感して、06のライフルに五発の弾を込め、ツァイス二一倍を三・五倍に合わせて構えるが、この杉林の中ではどうにもならない。せめて黒木（杉林）と雑木の境まで登り、見通しの良い場所に立ちたいと思っていたが、二〇メートルも登らない最悪のところで、三頭が一斉に吠え立て始めた。猪発見の知らせである。しかし、いつもの寝屋吠えや寄せ鳴きの声ではない。これは一頭の猪ではないぞ……。

確かに止め切る前の鋭い攻め込みの噛み鳴きであるが、三頭くらいの早立ちした猪を岩場に追い詰め、犬たち三頭が三方から必死で止め切ろうとしているようだ。ワンワン、ギャンギャンと静かな山間が犬たちの鳴き声で大騒ぎとなった。

「しめたぞ！　あと一息だ」とGPSで位置を確認すると、正面の大峰から落ちている左上の小峰の裏側の岩場であり、ここから二〇〇メートルの所である。

「今、行くから待ってろよ」と黒木の中の急斜面を必死で登るが、雪が膝まであって小谷のような所なのでなかなか思うように小峰を越えられない。

その時である。ワンワンワンワン、ギャッギャッギャッーンと恐ろしい止め鳴き声が沸き上がってきた。犬たちは俄に勝負に出たようだ。「よしよし、しめたぞ」と一気に急坂を登って、鳴き声を目がけて突進するが、肝心な止め鳴きが十五分くらいで突然、追い鳴きに変わった。

どうしたことかとGPSで確認すると、何と犬たちが二つに分かれて、シロ号とヨシ号は正面の大峰をまさに越えようとしている。そして、マロ号は私が登ろうとしている小峰の上に向かっている。

しまった。やっぱり三頭くらいの猪だった。これでは止められなくても仕方ない。しかし、こんなことくらいで負けて逃がす犬たちではない。千葉での猟期が二月十五日で終わったばかりで、それこそ百戦錬磨の猪止め犬たちである。

（つづく）

（上）大峰筋にある小屋の沢の頂点。左のこの沢が小屋の沢。右の松ノ木方向に登り続けると、この猟場の主峰である帯那山で、その途中にあるのがいつも狩る林道となる
（下）「ジジ、この下に猪がいるよ！」と、シロ号の猪認定だ